

## 第5章 京都大学構内の試掘・立合調査

泉拓良 浜崎一志

京都市左京区所在の吉田キャンパスにおいて、昭和54年12月から昭和55年12月までに実施した試掘・立合調査について述べる。試掘調査は10件で総面積は301m<sup>2</sup>、諸配管理設工事立合調査が8件、建物・貯留槽等工事立合調査が8件であった。以上の調査結果を、教養部構内、本部構内、医学部・病院構内の3地域にわけて説明する。なお、北部構内の立合調査では新たな知見が得られなかったため報告は省略した。

### 1 教養部構内(京都市左京区吉田二本松町・吉田近衛町、図17)

吉田食堂新営予定地(73)、実験排水槽設置予定地(84)の試掘調査と、楽友会館煙突工事(93)の立合調査がおもな調査であった。

**73・84地点の試掘調査** 73・84地点の地表は南西へ緩やかに傾斜し、北東端の地表は標高54.1m、南西端では53.6mをはかる。層位は各試掘坑でまちまちであった。これは各試掘坑で観察した層位がほとんど遺構の埋土であったためと思われる。ただし、各遺構の埋土を比較することによって、おおよその層序を復原できるので、試掘坑5・7の壁面層位図を用いて層位を説明する(図18)。表土からシルト層に至るまで11層を識別できた。第1層は表土、第2層は近世末期～明治時代に耕作に用いた暗灰色土。第3層は中世京都Ⅱ期中～新段階の遺物を含み、試掘坑1・4で検出した溝の埋土ともなっている。第4層は井戸SE1の埋土、第5層は土坑SK2の埋土である。第6・7層は平安京Ⅳ期新段階ごろの遺物を含み、試掘坑5の土坑SK1や試掘坑2の溝の埋土と類似している。第8層は試

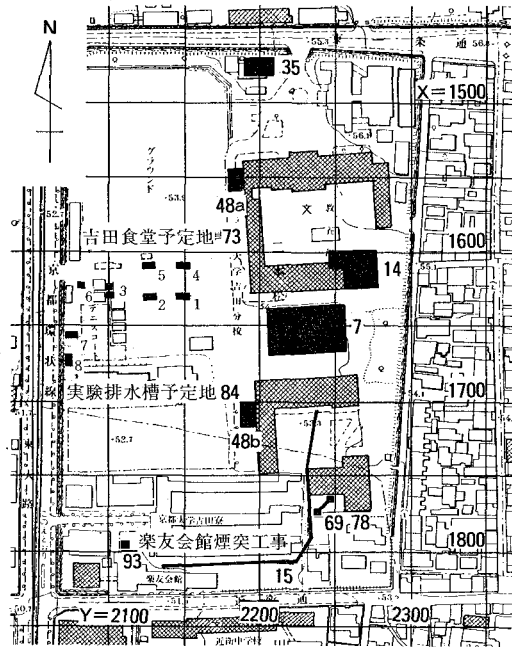


図17 教養部構内の調査位置 (1/5,000)

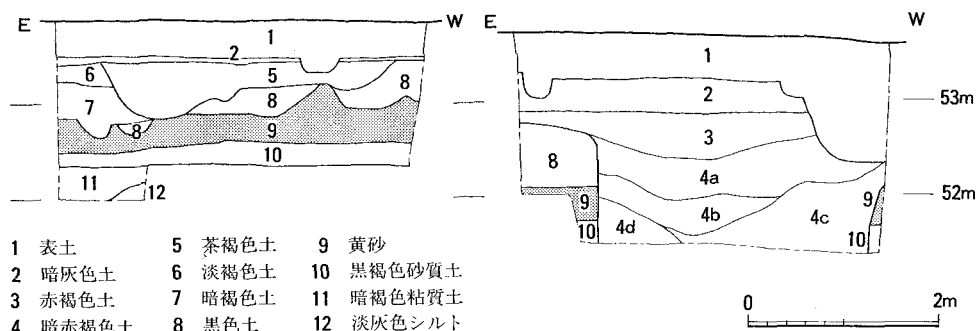


図18 教養部構内試掘調査の層位 (左73-5, 右84-7)

掘坑2・3・5・7にある黒色土で、試掘坑2では平安京Ⅲ期の遺物を包含する溝に切られている。第9層は教養部構内から北部構内まで広い範囲で確認できる黄砂で、弥生前期～中期の堆積である(図1, p. 6)。第10層は黒褐色砂質土で、試掘坑5ではこの層から縄文晩期滋賀里Ⅲの深鉢が出土した。第11層は第10層と同じころと思われる暗褐色粘質土層、第12層は年代不明の淡灰色シルト層である。

層位の説明中に述べた遺構以外に、試掘坑2では中世京都Ⅰ期ごろの遺物を出土した井戸(図版13-1)、試掘坑3では近世の路面・石積遺構・野壺を検出している。

出土した遺物は整理箱9箱分で、中世京都Ⅰ～Ⅱ期の資料が中心である。ここではそのうちSK1, SK2, SK3から出土した遺物について述べる。

SK1(図19Ⅲ1～Ⅲ4) 土師器皿のみで、口縁部計測法〔宇野81 p. 61〕による9.8個体分が出土した。口径14cmと9cmの皿が多い。口縁部形態(調整)をみると、大型皿では2段撫で面取りC<sub>5</sub>類(Ⅲ1)〔宇野81表5〕が46%, 1段撫で面取りD<sub>4</sub>類(Ⅲ2)が52%であるが、小型皿はすべて1段撫で面取りD<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>類であり、平安京Ⅳ期新段階に属する。

SK2(図19Ⅲ5～Ⅲ28) 多種類の遺物が出土し、土師器皿は62.0個体分を数えた。口径12cmと8cmの皿が多い。口縁部形態は、大・小の皿とも1段面取り薄手D<sub>6</sub>類(Ⅲ6・Ⅲ7・Ⅲ9・Ⅲ10・Ⅲ16)が過半数をしめ、1段撫で薄手E<sub>1</sub>類(Ⅲ8・Ⅲ11～Ⅲ15・Ⅲ17・Ⅲ18)がそれに次ぐ。Ⅲ14は土師器受皿、Ⅲ5は土師器碗である。土師器碗は土師器全体の2%と少ない。本遺構出土の土師器皿・碗は、法量の点では白河北殿北辺の調査SD06〔宇野81表11〕に近く、中世京都Ⅰ期新段階の最終末に位置付けられる。

この土師器に伴って多くの種類の土器が出土した。Ⅲ19は宇野隆夫のいう瓦器羽釜2・3類にあたる〔宇野78 p. 51〕。Ⅲ20は曲折口縁をもつ瓦器鍋、Ⅲ21・Ⅲ22はミニチュアの瓦器羽釜でⅢ21には三脚がつく。Ⅲ23は体部が外反し、口縁部が内側に肥厚する器形の瓦器盤である。Ⅲ24・Ⅲ25は須恵器のすり鉢で、宇野のいうすり鉢4類〔宇野81 p. 78〕にあ

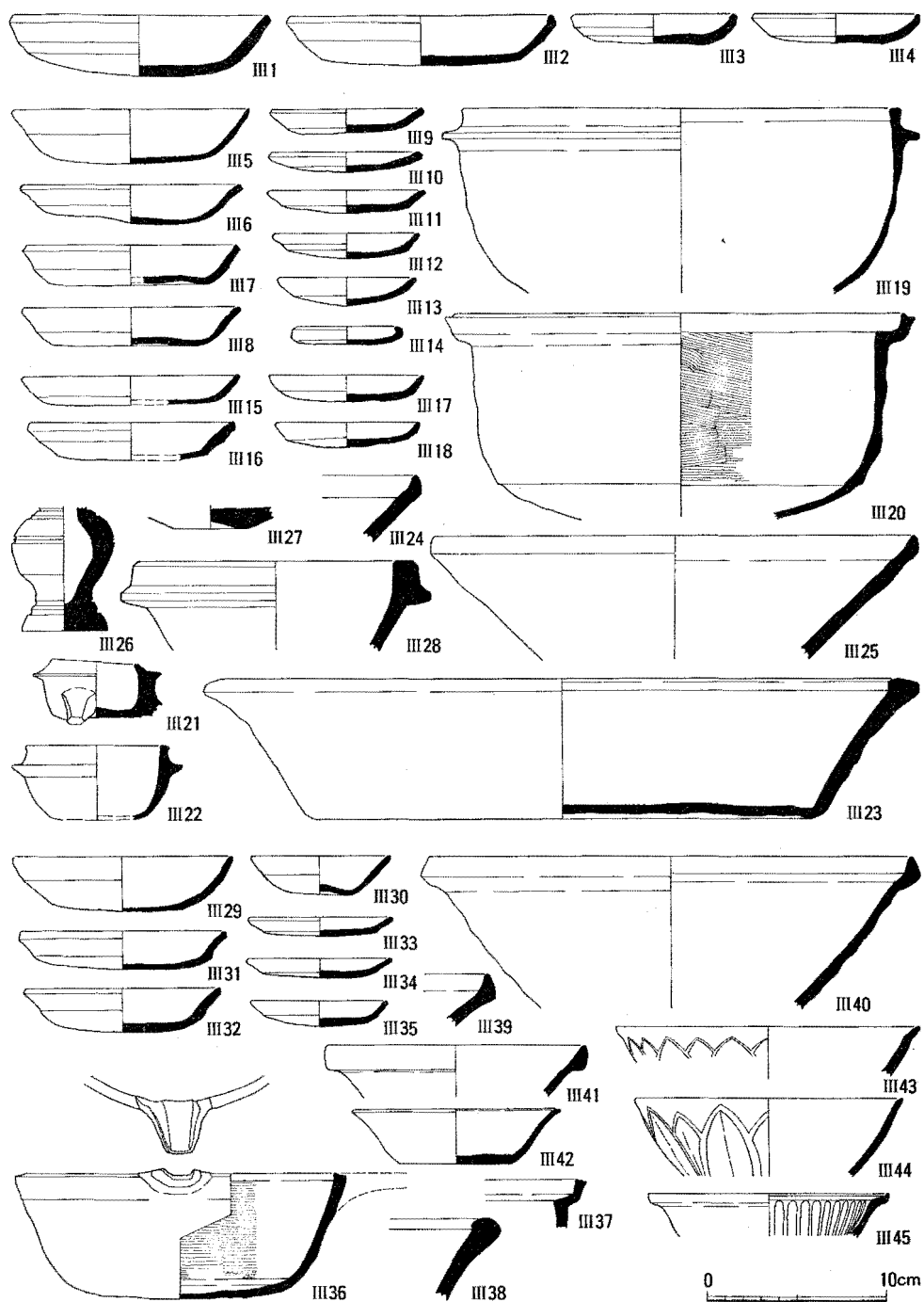


図19 教養部構内SK 1 (Ⅲ 1～Ⅲ 4土師器), SK 2 (Ⅲ 5～Ⅲ 18土師器, Ⅲ 19～Ⅲ 23瓦器, Ⅲ 24・Ⅲ 25須恵器, Ⅲ 26灰釉系陶器, Ⅲ 27青磁, Ⅲ 28石鍋), SE 1 (Ⅲ 29～Ⅲ 35土師器, Ⅲ 36～Ⅲ 38瓦器, Ⅲ 39・Ⅲ 40須恵器, Ⅲ 41・Ⅲ 42白磁, Ⅲ 43～Ⅲ 45青磁) 出土の遺物

S E 1 (図19Ⅲ29～Ⅲ45) 土師器皿は17.1個体分, 土師器碗は18.3個体分が出土した。土師器皿の口径は12cmと8cmが多い。口縁部形態は大型皿では1段撫でつまみ E<sub>2</sub> 類(Ⅲ31・Ⅲ32)が主で, 小型皿には E<sub>1</sub> 類(Ⅲ34・Ⅲ35)が多い。Ⅲ33は D<sub>6</sub> 類である。土師器碗の口径は皿と同様に12cmと8cmが多い(Ⅲ29・Ⅲ30)。小型碗で底部が凹む例はすべてかすかで(Ⅲ30), その数も小型碗のうち17.8%と少ない。本遺構出土の土師器皿・碗の口径は, 前述した S K 2 と同じで, 大型皿と小型碗が中世京都Ⅱ期中段階の白河北殿北辺の調査 S K 10〔宇野81表12〕より1cm大きい。しかし, 口縁部形態に E<sub>1</sub>・E<sub>2</sub> 類が多く, 碗と皿がほぼ同数であることからみて, S K 2 より新しく中世京都Ⅱ期古段階と思われる。

白磁碗Ⅳ類にあたる〔横田・森田78〕。Ⅲ42は口禿げの白磁皿で白磁皿Ⅸ-1・dにあたる。

Ⅲ43・Ⅲ44は青磁蓮弁文碗で龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類にあたる。  
Ⅲ45は青磁菊花文杯で龍泉窯系青磁杯Ⅲ-3類にあたる。

93地点の立合調査 煙突改修のため5m四方を掘削したところ、地表下0.85mの深さで石列と土坑を検出した。石列は東西方向に並び2列のみを確認したが、南へは続く可能性がある。北の列は南の列より0.1m低く石段状をなし、石列の北には1辺1.6mの隅丸方形を呈する土

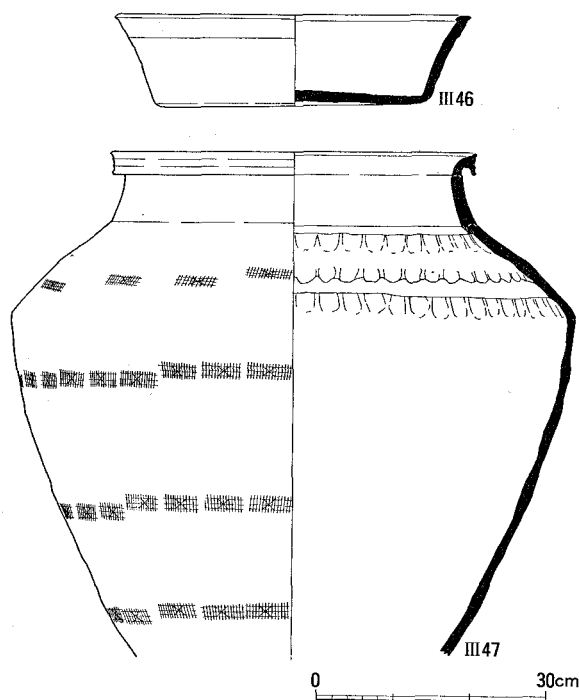


図20 楽友会館煙突工事立合調査出土の遺物  
(Ⅲ46瓦器, Ⅲ47常滑)

坑がある。土坑の東半には常滑産大甕が横位で口縁部を北に向けた状態で、その西に完形の瓦器盤が上から押し潰された状態で検出された(図版13-2)。埋土に焼土と炭が混ることからみても墓の可能性が強い。瓦器盤(図20Ⅲ46)は図19Ⅲ23と類似し、中世京都Ⅰ期新段階ごろのものである。常滑産大甕は頸部の識別できる器形でN字状口縁をもち、第Ⅲ段階〔橋崎75, 赤羽77〕にあたる。

以上のように、教養部構内での今年度の調査は多くの成果をあげることができた。とくにSE1出土の一括遺物は14世紀前葉の陶磁器を知る上で貴重な資料であり、またSK1とSE1出土遺物の差は、13世紀と14世紀の土器様式の差を示すであろう。73・84地点では瓦がほとんど出土せず、平安後期の瓦が集中して出土した48b地点〔京大埋文研79 p. 49〕との差が注目される。この点については当地付近に比定されている吉田社旧社地や福勝院〔川上77〕との関係をさらに検討する必要がある。

## 2 本部構内(京都市左京区吉田本町, 図21)

工学部建築学教室校舎新営予定地(71)の試掘調査と、諸配管埋設工事(図21黒太線の部分)の立合調査がおもな調査であった。

**71地点の試掘調査** 調査地の地表は東から西へ緩やかに傾斜し、試掘坑7の地表は標高

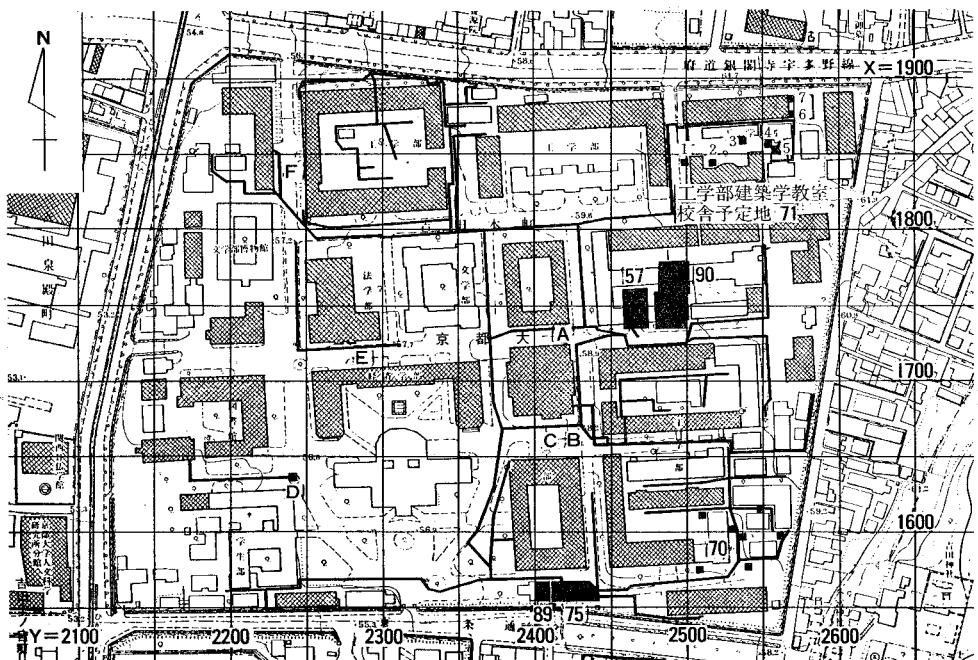


図21 本部構内の調査位置

62.3m, 試掘坑1では61.7mをはかる。試掘坑6・7では表土下すぐに無遺物の砂層があるが、それ以外の試掘坑には中世の遺物包含層が存在し、それぞれよく似た層位を呈する(図22)。表土から下約3.2mの間に16層を確認できた。第1層は表土, 第2層は近世末期～明治時代の耕土層, 第3・4層は年代不明の整地層である。第5～7層は幅約2.5mで深さ約1.4mの溝SD1(図版13-3)の埋土, 第8層は土坑SK1の埋土, 第9・10層も土坑の埋土である。第11層以下は遺物を包含していない。第11層は教養部構内の第9層, 第13層は同じく第10層に相当し, 縄文時代～弥生時代の堆積であろう(図18・22)。

出土した遺物は整理箱2箱分で、そのほとんどがSK1とSD1から出土した中世京都I期中～新段階の土器類である。ここではSK1とSD1出土の遺物について説明する。

**SK1** 土師器皿だけが出土した(図23Ⅲ48～Ⅲ51)。口径13cmと9cmの皿があり, 大型皿(Ⅲ48)の口縁部形態は1段撫で面取り平底D<sub>5</sub>類, 小型皿(Ⅲ49～Ⅲ51)は1段撫で面取りD<sub>4</sub>類である。中世京都I期中段階の特徴をもつ。

**SD1** 土師器皿, 瓦器羽釜・鍋, 青磁碗が出土した(図23)。土師器皿は大型皿2点(Ⅲ52・Ⅲ53)のみであり, 口径は13cmで口縁部形態は1段撫で薄手E<sub>1</sub>類である。瓦器羽釜には口径の差があり, 口径18cmのものは羽釜1類〔宇野78 p. 51〕(Ⅲ55)のみ, 口径22cmのものは羽釜1類と羽釜2類(Ⅲ56), 口径24cmは羽釜2類である。瓦器鍋は曲折口縁のもの(Ⅲ57)が出土した。Ⅲ54は鍋が不明瞭な青磁蓮弁文碗で, 龍泉窯系青磁碗I-5類〔横田・森田78〕にあたる。土師器皿は口縁部形態がSK1出土品より新しく, 瓦器羽釜が教養部構内SK2(図19)よりやや古く, 本資料は中世京都I期新段階ごろであろう。

**諸配管理設工の立合調査** 本部構内のほぼ全域を網目状に立合調査を行なったが, 新

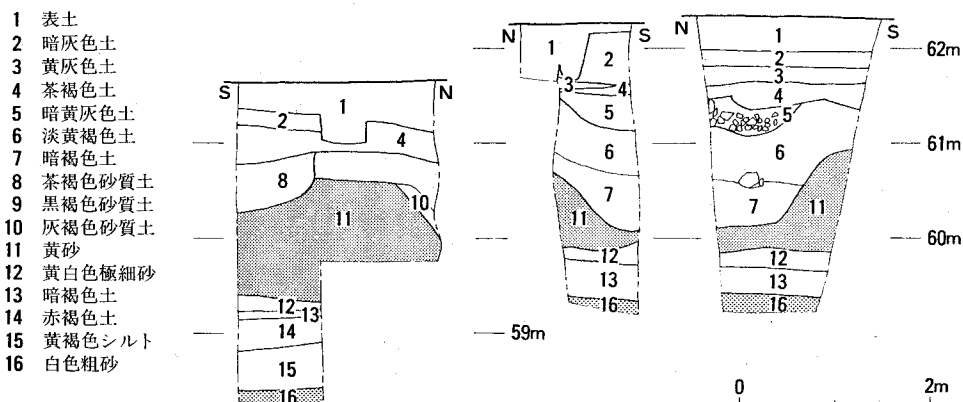


図22 本部構内試掘調査の層位 (左71-2, 右71-4・5)

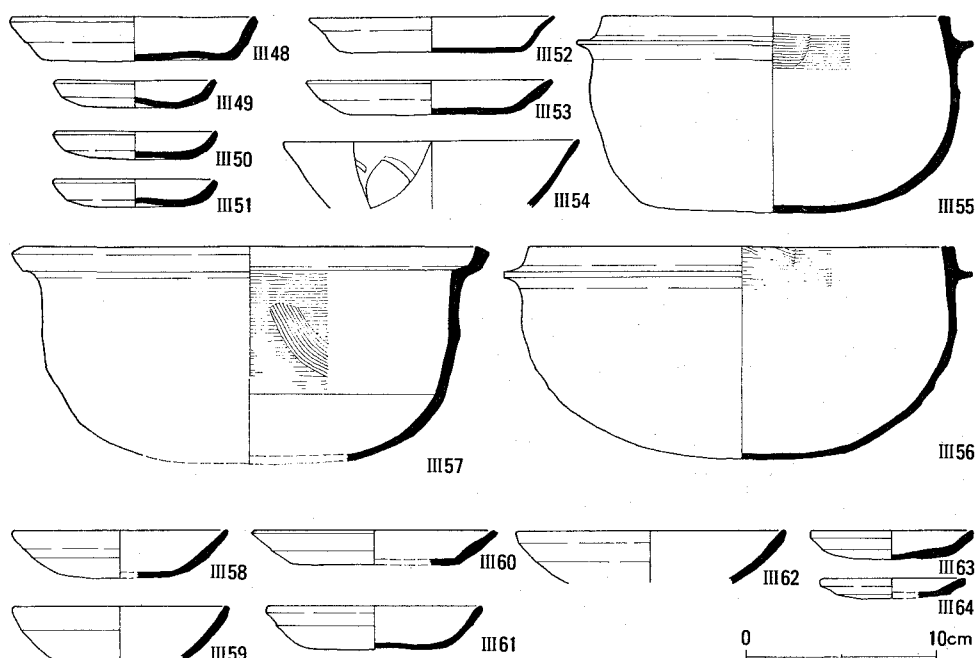


図23 本部構内SK1 (Ⅲ48～Ⅲ51土師器), SD1 (Ⅲ52・Ⅲ53土師器, Ⅲ54青磁, Ⅲ55～Ⅲ57瓦器), 病院構内SK1 (Ⅲ58～Ⅲ64土師器) 出土の遺物

たな知見を得たA～F地点について説明する(図21)。A, B, Dの3地点で近世の路面を, C地点では黒褐色の埋土をもつ中世の溝を検出した。また, E地点では黄褐色土(図22第15層相当)から縄文後期北白川上層式の粗製深鉢片を採集し, F地点では黄砂下で図22第13層に相当する黒褐色土の堆積を確認した。

本部構内では2本の近世の道路を確認している。今回検出したA・B地点の路面は, 75地点の道路SF1(第4章)の続きであり, D地点の路面は57地点で検出した白川道〔京大埋文研78〕の一部と思われる(図21)。中世の遺構は, 75地点の溝SD3の続きをC地点で確認した。本年度の90地点(A X 28区)の発掘調査で, 鎌倉時代の建物, 井戸, 土器溜が検出されており, 前述した71地点の溝SD1はこの遺跡の北限にあたる可能性もある。

### 3 医学部・病院構内(京都市左京区吉田橋町・聖護院川原町, 図24)

医学部特殊RI実習室新営予定地(83), 実験排水槽設置予定地(85), 給水管埋設予定地(86), 和進会館移転予定地(72), 内科総合病棟新営予定地(88), 給水センター設置予定地(87)の試掘調査6件がおもな調査であった。

85地点, 86地点, 87地点, 88地点の試掘坑23～25では, 表土もしくは近世の遺物を含む

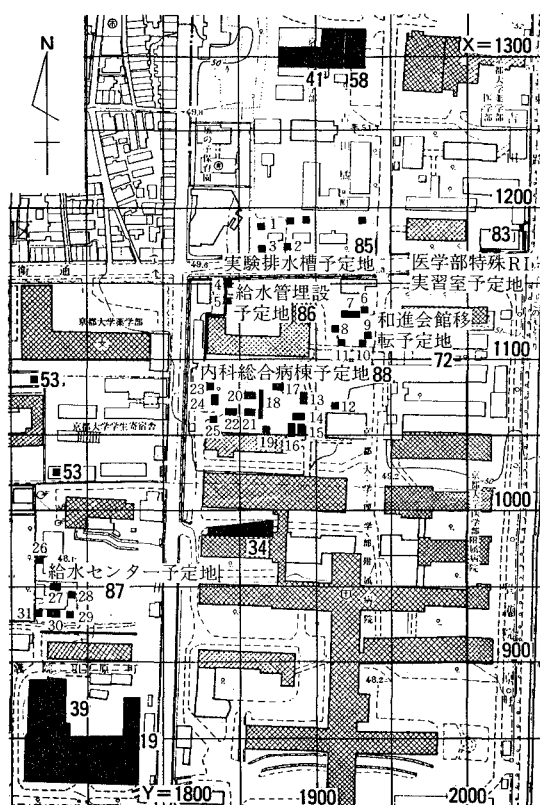


図24 医学部構内・病院構内の調査位置

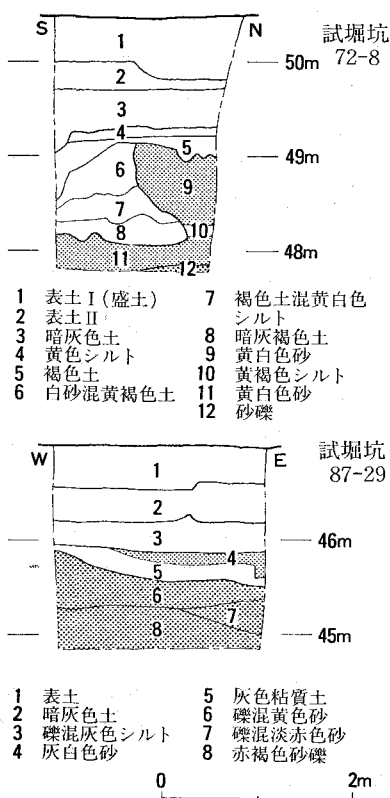


図25 病院構内試掘調査の層位

灰色粘質土の直下に高野川系砂礫がある。87地点ではこの砂礫(図25下第6～8層)から平安京Ⅳ期～中世京都Ⅱ期の遺物が出土した。一方、83地点、72地点、88地点の試掘坑12～22では、表土下もしくは包含層下に砂やシルトの堆積をみる。83地点や72地点ではこのシルト層を掘り込む中世の土坑を多く検出した(図25上第6～8層)。また、72地点の試掘坑7では、一辺0.8m以上の方形を呈し、底に礫を敷き、その上に土師器皿・椀を埋めた土坑SK1(図版13-4)を検出した。出土した土師器皿・椀は(図23Ⅲ58～Ⅲ64)、口径8～9cmと12cmのものが多く、中世京都Ⅰ期新段階ごろに属する。

医学部・病院構内では、19地点、39地点や41地点、58地点のように平安後期以後の遺構が多数発見される地域と、85地点や87地点のように古代・中世の遺構がまったく発見されない地域がある。後者の地域は高野川・鴨川の氾濫原であった可能性が強い。